
HEAVENの小話

coconeko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEAVENの小話

【Nコード】

N4030H

【作者名】

c o c c o n e k o

【あらすじ】

持ち前小説「HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！」シリーズの小話です。キャルが夜目を覚ますと、セインはまだ起きていて…。ほのぼのしとります。まさに小話。

（前書き）

次回作の構想は出来ているのですが、手がつけられず。浮かんだ小話だけでも思いUPです。すみません。

さわりと、風が揺れる。ひやりとした、心地よい冷たさが頬を撫でた。

目の前には、動物避けの焚き火。

「何してんの？」

ちよつとした森の中で、砂地が開けた場所に、今夜は寝泊りをしようとしたのが、二時間ほど前。

軽く食事を済ませて、床を作り、キヤルが目を瞑ったのは、十分くらい前だった気がする。

「眠れない？」

眼を瞬かせ、こちらを見上げる小さな少女を、長身の青年が、少し離れた場所に腰を下ろしたまま見下ろした。

「あたしが質問しているのだけど？」

「そうだった。ごめん」

素直に謝る青年に、キヤルは一つ溜息をつき、彼が掛けてくれたであろうブランケットの下から体を起こす。

「もうすっかり、星の季節になったなあって、思ってた」

「セインはそういうの、好きなの？」

「好きっていうか、人並みには綺麗だなあって、思うよ？」

そう言った青年が、ほら、と、天空を指差した。

「………」

一瞬、言葉を失うほどの。

「綺麗でしょう？」

「……すごい！」

満点の星たちはキラキラと、まるで降り注いで来るように、数え切れない小さな輝きを放つ。

「ここまで沢山見えるのは珍しいよね。昨日まで降っていた雨のおかげかな」

雨が降ると、空気中の塵が洗い流されて、空気が透き通るから、星が良く見えるようになる。

「どうして起こしてくれないのよ？」

セインがこの星空を独り占めしていたのかと思えば、キヤルはふう、と、頬を膨らませた。

「えっ、だって、キヤル寝てたし？」

そういう答えが返って来るだろう事は百も承知のキヤルだ。

「寝ていたからって、こんなに綺麗なんだから見せなさいよ！それとも何？あたしに見せる気は無いって事？」

「そんなことないよ。明日の朝になったら教えてあげようと思っていたし」

「馬鹿ね！教えてもらったって、こんなの見なきゃ分からないじゃない！」

空を指差しながら詰め寄るキヤルに、セインはへらりと笑う。

「ああ。百聞は一見に如かず、って、言うものね」

ごいん

鈍い音が響いた。

「痛いよ！」

衝撃でずれた眼鏡をかけなおしつつ、殴られた頭をさするセインの目には涙が滲む。

少々離れているからと、油断したのがいけなかった。普通に地べたに腰を下ろして足を伸ばしていた自分より、寝ていながらも上半身をこちらに向けていたキヤルの方が素早かった。

「そんな御託はどうでも良いのよ！っていうかそんな諺を知っているなら尚更起こしなさいよ！」

「はい。ごめんなさい」

セインの襟首を鷲掴みにして、まだ拳を作ったままのキヤルに、セインは迫力負けして、再び謝った。

「じゃあ、一緒に星見をしようか？」

「ごそごそと、何をしているかと思えば、はい、と、カップを手渡

された。

「え？」

思わず受け取って、両手で持っていれば、とぼとぼと紅茶を注がれた。

「ほんとだねー、僕もキャラと一緒に星を見たくて、起こそうかどうか悩んだとこだったんだ」

そう言くと、セインは自分のカップにも紅茶を注ぐ。

セインの影に隠れて見えなかったが、すぐ傍に、紅茶のセットが置いてあった。そして、このタイミングで紅茶が注がれ、キャラが手に持っているカップには、呆然としている間にとつと角砂糖とミルクが注がれて、ご丁寧にも、くるくるとスプーンでかき混ぜられた。と、いうことは。

「紅茶淹れてみたまでは良かったんだけど。あんまり気持ち良さそうに寝ているから、どうしようかなあって」

「セインって、間抜けは間抜けだけど、時々底抜けに間抜けよねえ」
かき混ぜられて、カップの中でクルクルと回る液体を見詰めて、
キャラはしみじみと呟いた。

「酷いな。そこまで言う事ないじゃないか」

「だって、星に気がついて、紅茶飲みながら見ようって思いついて、いそいそ準備して、あたしの分まで用意して、その肝心のあたしを起こそうとしてから起こすべきか悩んだんでしょ。目に見えるようだよ」

一連の自分の行動を言い当てられて、セインはぴしりと固まった。

「な、なんでわかるの？」

「状況証拠が揃っているもの。すぐ出てきた紅茶も、カップが二つあるのも、そういうことでしょう」

セインは時々、キャラは探偵にでもなったら良いのではないかと
思う。

「うん。美味しいわね」

一口飲んで、満足そうにキャラが笑う。

「えへへ」

キヤルの笑顔につられてセインも笑う。

「キヤルとこうして、星が見れるの、嬉しいな」

「はいはい」

いい加減な返事をしつつ、キヤルも嬉しく思う。だって星は綺麗で、紅茶が美味しい。

その紅茶が、いつもより甘いのは、きっとセインが角砂糖の量を間違えたからだ。

二人で空を見上げて、のんびりとした時間を過ごす。こんな日、たまにはあってもいいだろう。

暫くして、星座の講釈を始めたセインの話が長くなり、うんざりしたキヤルに殴られるのは、この二人らしい出来事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4030h/>

HEAVENの小話

2010年10月16日14時58分発行